

会議録

会議の名称	令和6年度第1回茨木市産業振興アクションプラン推進委員会 補助金審査部会（産業活性化プロジェクト促進事業、地域魅力アップイベント創出育成事業）
開催日時	令和6年4月30日（火） (午前・ 午後) 0 時 30 分 開会 (午前・ 午後) 3 時 25 分 閉会
開催場所	茨木市役所本館3階第2会議室
議長	野口 義文 氏（立命館大学 副学長）
出席者	野口義文氏（立命館大学 副学長）、伊津田崇氏（中小企業診断士）、辻田素子氏（龍谷大学 経済学部）、赤松正巳氏（北おおさか信用金庫 業務推進部）、中野拓二氏（茨木商工会議所）
欠席者	なし
事務局職員	河原商工労政課長、武部商工労政課長代理兼商工振興係長、 大下商工労政課職員、上山商工労政課職員 【4人】
開催形態	一部非公開
議題（案件）	(1) 会議の公開について (2) 茨木市地域魅力アップイベント創出育成事業及び茨木市産業活性化プロジェクト促進事業補助金趣旨説明 (3) 応募団体プレゼンテーション及び審査
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> ・資料1 茨木市地域魅力アップイベント創出育成事業補助金募集要領 ・資料2 茨木市地域魅力アップイベント創出育成事業補助金の選考について ・資料3 茨木市地域魅力アップイベント創出育成事業補助金 審査基準及び配点表 ・資料4 茨木市産業活性化プロジェクト促進事業補助金募集要領 ・資料5 茨木市産業活性化プロジェクト促進事業補助金の選考について ・資料6 茨木市産業活性化プロジェクト促進事業 審査基準及び配点表

議事の経過

1 開会

事務局：(開会のあいさつ)

2 趣旨説明

事務局：(資料 1～6 説明)

3 会議の公開について

事務局：①本部会について

原則公開とし、市民等の傍聴を認める。ただし、申請案件の審査に関する部分は、非公開とする。(※茨木市審議会等の会議の公開に関する指針第 3 より)
②議事録について

公開部分については、市のホームページ等で公開する。ただし、内容は要約したものとし、個々の発言者の名前は記載しない。

③傍聴希望者：なし

4 応募団体プレゼンテーション及び審査

(1) 地域魅力アップイベント創出育成事業申請案件：

1 件目の CO-クリエーションデザイン smileinfeel (以下申請者) から、事業概要及びアピールポイント等についてプレゼンテーションがあり、その後質疑応答があった。

<質疑応答>

A委員：イベントとして一番の課題は何か。

申請者：補助金の主旨として、イベント規模を年々大きくしていくことを想定しているが、規模を大きくしていくためには経費の増大やごみの問題は避けられず、イベントの拡大と経費の増額との兼ね合いに悩んでいる。

A委員：クラウドファンディングを実施してはどうか。

申請者：2 年前に実施したが、イベントを支援したい方にあまり馴染みがないことや手数料の負担等、課題の方が多かった。そのため昨年は協賛金を直接募集するとともに、当日は Paypay での募金を呼び掛けた。

A委員：広報媒体として市の記者クラブに呼びかけるのはどうか。

申請者：プレスリリースも積極的に取り組んでいる。また別のイベントで知り合った NHK の記者の方が興味を持ってくださったので、そこから取材等につながればいいと考えている。

B委員：市内外からの観光客を誘客する手段はどのようなものがあるか。

申請者：イベントの来場者としては市内の方が 6 割、市外の方が 4 割と認識している。この数字はホームページや SNS のアクセス解析を行い割り出している。また SNS 広告も活用しており、それは市外の方を対象として発信するよう設定している。

B委員：広告には予算をかけているのか。

申請者：前回プレゼンの際、審査委員の方からもう少し広告費をかけてもいいのではない

かという意見があつたため、昨年より予算を増額している。

B委員：中央公園グラウンドとは異なり、バラ園でのイベントは珍しく貴重だと感じた。

雨天の場合はどうするのか。

申請者：少雨の場合は開催予定だが、プログラムの変更等はあるかもしれない。

C委員：発展性も大切だが、継続性も大切という点で、来場者に継続して来てもらえるような仕掛けが必要と思われる。バラ園で光と音の演出というイベントはとても良いと思うので、継続する仕掛けづくりを考えていってほしい。

申請者：収入という点では、昨年「ばらっくま」というバラを持ったくまの手作りチャームを販売したところ、非常に好評で1日目は15時には完売となった。急遽2日目分も用意して販売したところ、1日目に買えなかつた人が買いに来ていたこともあり、ものの5分で完売してしまつた。この売れ行きは予想を大きく上回るもので、販売収益は事業費に活用することができた。このようなグッズの販売は今年も行いたいと考えている。

D委員：収入に出演料とあるが、どのような方から徴収しているのか。

申請者：出演料は主にダンスチームの皆さんから頂いている。

D委員：何名くらい出演されるのか。

申請者：2日間実施していた際は10組程度出演いただいていた。

D委員：課題に人出不足とあるが、イベント継続の仲間づくりのため、何か考えられていることはあるか。

申請者：イベントを手伝ってくれる方はいらっしゃるが、照明や音響といった技術が必要になる部分はやはり人出が足りず、外部委託になり予算がかかっている。ただ照明に関しては、私自身が勉強し技術を身につけたため、昨年から1名分は私の方で全て担当している。これにより経費削減につながつてゐる。

(2) 地域魅力アップイベント創出育成事業申請案件：

2件目のIBARAKI JAZZ CLASSIC FESTIVAL 実行委員会（以下申請者）から、事業概要及びアピールポイント等についてプレゼンテーションがあり、その後質疑応答があつた。

<質疑応答>

B委員：一昨年は来場者数3,500人だったが、昨年は5,000人と1年で1,500人来場者が増えている。その要因は何だと思うか。

申請者：一昨年はコロナ流行後初めての開催だったため、密を避けるためにもそこまで告知を出さなかつた。昨年はコロナも5類に移行し、積極的に告知できたことと、出演者の方にも宣伝を呼び掛けたこともあり、5,000人という集客につながつたと考えている。また昨年は会場が1つ増えたことも、集客につながつたと思われる。

B委員：今年は茨木別院が会場として利用できないということだが、その代わり新しく開館したおにクルや、JR方面に会場を増やすことは考えているか。

申請者：今年は新たにまちづくり会社のFICベース1階を利用するため、会場数としては減つてはいないが、収容人数は茨木別院より少なくなる。その分会場を増やすという選択肢もあるが、JR茨木駅のスカイパレットを会場にすると、出演者の移動

にかなり時間がかかるてしまう。会場が増えても距離が空いてしまうと賑わっている雰囲気が薄れてしまうため、会場は阪急側に絞ったほうが良いのではないかと考えている。またおにクルを使用することも考えたが、個人的に IBALAB@広場の方がフラットで出演者と観覧者のコミュニケーションがとりやすいと感じているため、どちらかを利用するのであれば IBALAB@広場の方が良いのではないかと思っている。他に良い場所があれば会場を増やしていきたいとは考えている。

E委員：今年度の新しい取組として、会場変更以外に何か予定はあるか。

申請者：1つ目は大学生連携の中で、今までではこちらから学生にお願いして動いてもらっていたため、どうしてもイベント直前だけの関わりになってしまっていた。しかし今年はすでにやりたいことがある学生とのつながりがあるため、今の時期から計画を立ててイベントに携わってもらえると考えている。

2つ目として、今までではこのイベントにおける空間づくりをここまで重要視はしていないなかつたが、ここ1年ほど色々なイベントに携わっていく中で会場の雰囲気によつても、観覧者の集客や滞留に影響があると感じた。そのため会場の空間づくりにおいては今まで以上に力を入れて取り組んでいきたいと考えている。それにより新しい層を取り込むことができると考えている。

C委員：先ほど会場を JR 茨木駅まで広げる話があつたが、将来的にはどのように考えているのか。

申請者：このイベントはもともと阪急茨木市駅ソシオビル管理組合のエリアマネジメント部会からスタートした取組であるため、やはり阪急茨木市駅周辺にはこだわりがある。何度か実施している中で、会場ごとの距離が空いてしまうと、出演者が会場を順に回っていくため、負担が大きくなってしまうと感じている。もしスカイパレットでイベントをするならば、ジャズではなく別のイベントを企画したいと考えている。

D委員：協賛金について、令和7年からは市補助金に頼らず協賛金で運営していくことを目指しているが、協賛金の新しい依頼先はあるのか。

申請者：それについては今から声をかけていこうと思っている。なかなか観覧者から入場料は徴収できないため、現状は補助金が無くなるとイベントの継続が難しくなってくる。そのため、イベント継続に向けて収入における協賛金の比率を増やすしていく必要がある。直近2年間は1口あたりの協賛金をコロナ前の半分にしていたが、今年からコロナ前の金額に戻そうと考えている。また今後はイベントの価値を高めて、協賛金も増額していきたいと考えている。

A委員：立命館大学の大坂いばらきキャンパスに情報理工学部と映像学部が移転してきたこともあり、新しい連携の形を模索してもいいのではないか。また今年も高槻ジャズストリートが開催されるが、イベントとしての差別化を図りつつ、発信していけば新たなファンも獲得できるのではないか。

申請者：高槻ジャズストリートは大きな会場で実施するイメージがあるが、こちらのイベントはあくまでも街中で音楽が楽しめるというテーマを崩さず続けていきたいと思っている。

(3) 地域魅力アップイベント創出育成事業申請案件 :

3件目のLet's遊ビバ実行委員会（以下申請者）から、事業概要及びアピールポイント等についてプレゼンテーションがあり、その後質疑応答があった。

<質疑応答>

B委員：この補助金の主旨として、市内外からの集客ということがあるが、これまで実施してきたイベントと比較してそのために予算を増額したところはあるか。

申請者：ナイトバブルにかかる費用が、集客のために増額した部分になる。また市外への発信のためインスタグラムの有料広告を活用したいと考えている。以前のイベントでも同様に告知を行い、集客につながったと考えている。市内にはポスティングを実施し、チラシを持ってこられた方が300～400人ほどいた。それ以外の来場者はインスタグラムの広告を見て、ナイトバブルを目的に来られた方だと思われる。チラシを持たない方は来場者の7割ほどで、インスタグラムの有料広告で効果的に集客が図ると考えている。事業費の大半はナイトバブルとインスタグラムの有料広告を想定している。

B委員：申請書を見せてもらい、何点か気になる点がある。1点目はナイトバブルの費用が実行委員に支払われる点。2点目が出店する事業者に市外の事業者が多い点。市の補助金を活用するにあたって、市外事業者に多く費用を支払うのは少し気がかりである。

申請者：ナイトバブルは見積を依頼した事業者から、さらに実施事業者に発注する予定をしている。また従来のイベント出店者については、出店を募るために作成したインスタグラムのアカウントがあり、そこに登録している事業者に出店してもらっている。登録している事業者は大阪や関西一円の事業者であるが、今回のイベントについては商工会議所を通じて市内事業者に優先的に声をかけるなどは可能である。

C委員：2日間ともナイトバブルを実施するのではなく、両日で実施する内容を変えると、イベントの形も変わってくるのではないか。例えばナイトバブルに費用がかかるのであれば、他のイベントにはあまり費用をかけず、最終日のメインイベントとしてナイトバブルを実施してイベント内容にメリハリをつける等、検討してもいいのではないか。2日間とも同じ内容を実施する理由について、少し疑問が残った。

申請者：ナイトバブルを2日間実施することにこだわっているわけではなく、もし別のイベントを実施する場合、別のコンテンツを検討する必要が出てくる。他のコンテンツを実施することは可能だと考えている。

E委員：ナイトバブルは誰が実施するのか。

申請者：ナイトバブルを行う団体はさまざまある。今回は見積を依頼した事業者からナイトバブルの実施団体に依頼する予定だと聞いている。団体は新潟に拠点を置いているため、依頼するには少し割高になってしまう。

E委員：ナイトバブルはその団体でなければ実施できないものなのか。それとも別の団体でも実施は可能なのか。

申請者：一般の方が同様のイベントを実施することは難しい。また別の団体に依頼しても

費用は同様にかかるものである。今回実行委員である事業者に依頼して見積を作成している理由は、実行委員である事業者にナイトバブルのノウハウを覚えてもらい、次回以降は自前でイベントを実施しようと考えているからである。そのため次回以降のイベントではここまで費用が高くなることはないと考えている。

E委員：昨年から団体としてイベントを行っているが、それ以前に何か活動はしていたのか。大規模イベントを立て続けに開催しているが、実行委員はそれぞれイベント開催等経験があったのか。

申請者：私個人は一昨年ごろから子ども向けイベントを少しづつ実施していたが、実行委員会体制となり本格的にイベントを開催し始めたのは昨年からである。

A委員：夜も行うイベントであるため、安全管理が重要であるが、会場が3か所もあるため安全対策が脆弱になるのではないか。そこは十分意識してイベントを実施してもらいたい。

(1) 産業活性化プロジェクト促進事業申請案件：

1件目のエンジョイ株式会社（以下申請者）から、事業概要及びアピールポイント等についてプレゼンテーションがあり、その後質疑応答があった。

<質疑応答>

B委員：市内就労支援事業所のほぼ全部を掲載するということか。また、作成するハンドブックの部数の根拠が知りたい。

申請者：市内事業所20か所に絞って掲載する。茨木市障害福祉課などのネットワークを利用して募集する。ハンドブック作成が初の試みであるため、部数を1000部とした。

D委員：ハンドブック作成により、障がい者の賃金は、どのように向上していくのか？

申請者：ハンドブック作成を、障がい者の仕事とする。また、展示会での企業とのマッチングで、新たな就労案件を得て、障がい者の賃金の向上につなげていきたい。

E委員：ハンドブック作成は、年に1度とし、次年度以降はどうするのか。事業所の掲載料を増やすことで自立し、展開していくということか。

申請者：福祉では、掲載料はご法度であるが、あえてチャレンジする。掲載料の認知度向上に期待したい。ハンドブックは定期的に更新し、次年度以降も継続したい。将来は補助金に頼らず自立を目指している。紙媒体以外に、ウェブ版カタログの掲載やSNS発信で、シェアを拡大したい。

A委員：今回の取組は、障がい者に就労機会の提供が不十分であるという社会問題に着目した重要な取組である。今回のハンドブック作成は、どこにフォーカスを当てているのか。

申請者：障がい者の工賃向上を考えている。福祉事業所と企業の1対1では、大量受注のため、取引成立がむずかしいが、事業所連携により、受注幅が広がり、取引成立につながる。

A委員：色々な連携の経営スタディも取り入れて、可視化できるものを作成してほしい。

C委員：作業所の方々が任された作業に対してきっちりと丁寧に取り組む姿勢などをしっかりとアピールするハンドブックを作成し、企業には大いに活用してもらい、相

互の協力関係をつくっていってほしい。

(2) 産業活性化プロジェクト促進事業申請案件：

2件目の茨木青年会議所（以下申請者）から、事業概要及びアピールポイント等についてプレゼンテーションがあり、その後質疑応答があった。

<質疑応答>

C委員：市のキャラクターに茨木童子があるが、五十鈴姫を創り出す狙いは何か。将来的に茨木童子とのコラボは考えているか。

申請者：海外の方に興味を持つてもらえるよう、歴史的要素がある五十鈴姫を選んだ。萌えキャラなどとしても狙える五十鈴姫を創り出し、いずれは茨木童子とのコラボも考えたい。

B委員：五十鈴姫が、茨木で生まれ育ったという確証はあるか。次年度以降のイベント継続は考えているか。また、どのように海外の方を呼び込んで、インバウンドにつなげるのか。

申請者：五十鈴姫の出生については、ネットなどでリサーチした。初代五十鈴姫、二代目五十鈴姫など、五十鈴姫コンテストを実施し、企業にも協賛してもらいながら、来年度以降も継続したい。SNS拡散や、市内大学の留学生とのつながりなども利用してイベント発信を行い、インバウンドにつなげていきたい。

A委員：キャラクターの重要なキーワードとして連想性が不可欠である。五十鈴姫から、どのように茨木市を連想させるのかが、大きなポイントである。ただし、五十鈴自体が固有名詞のため、連想性がやや困難に思える。対応策などは考えているか。

申請者：連想性に着目できておらず、不十分であるため、今後はキャッチフレーズなど踏まえて、対応策を考えていきたい。

(3) 産業活性化プロジェクト促進事業申請案件：

3件目の COFFEE MEETS 実行委員会（以下申請者）から、事業概要及びアピールポイント等についてプレゼンテーションがあり、その後質疑応答があった。

<質疑応答>

C委員：前回実施の COFFEE MEETS との違いはなにか。今回、珈琲だけに特化せず、珈琲以外にも範囲を広げたということか。

申請者：COFFEE MEETS は、主に茨木市内の珈琲ロースターによる珈琲の飲み比べをメインとしたイベントである。現在は関西近郊の実施へと拡大した。今回は、改めて茨木市に回帰し、珈琲を飲みながら、クラフトの作り手と消費者との関係性を育めるようなイベントを行う。

E委員：説明にある「クラフト作家」、「作り手」、「クリエイター」というのは、どのようなレベルの方を、カテゴリーとして定義しているのか。また、どれくらいの数を見込んでいるのか。

申請者：クラフトの創作活動を行い、将来創業を目指している方を定義している。個人を含めて50ほどが、茨木市に存在している。コミュニケーションの場の提供により、作り手の思いが、直接消費者に伝わる。

B委員：まちづくり会社と連携し、将来、市内で事業ができるようなことも検討してほしい。

A委員：珈琲文化を、継続的に茨木市に定着させていくことは重要である。珈琲の印象から入っていくというコンセプトメニューは、次回以降も変わらないか。

申請者：地域内循環を目指している。珈琲をツールに、野菜やクラフトなど、作者がこだわって作った茨木産の思いを、今後も茨木の方に届けていきたい。

(4) 産業活性化プロジェクト促進事業申請案件：

4件目の茨木市建設総合協同組合（以下申請者）から、事業概要及びアピールポイント等についてプレゼンテーションがあり、その後質疑応答があった。

<質疑応答>

C委員：主催者の経費負担が大きいため、今後の継続に向けて、何か検討していることはあるか。

申請者：前回は、造園組合に協賛してもらった。将来的には、イベント経費の一部負担も検討している。他の団体にも幅広く声掛けしていきたい。

B委員：人材不足や防災など社会情勢に応じた取組で、とてもすばらしいイベントである。今後は、自主運営でイベントを継続するために、検討していることはあるか。

申請者：入場料無料のため、来場者の財布の紐も固い。前回は、用意したキッチンカーの売上げが少なく、出店料を返金した。無料グッズの配付は、すぐになくなるほど好評であるため、今後は市を含む子ども関係の団体などからスポンサー料をもらうなどを検討していきたい。

E先生：入場料などの有料化を試みたことはあるか。また、来場者のリピーターは多いか。

申請者：入場料有料化は試みていない。入場料無料でも、「待たされた」などのクレームが多い。来場者は、前回体験できなかったことにチャレンジするリピーターも多い。

A委員：とてもすばらしいイベントなので、今後も継続してほしい。資金を集めるために、オリジナルグッズなどを常時販売してみてもよいかもしれない。

5 審査結果

(1) 地域魅力アップイベント創出育成事業申請案件

①CO-クリエーションデザイン smileinfeel

500点中 356点 ⇒ 採択案件

②IBARAKI JAZZ CLASSIC FESTIVAL 実行委員会

500点中 366点 ⇒ 採択案件

③Let's 遊ビバ実行委員会

500点中 315点 ⇒ 不採択案件

(2) 産業活性化プロジェクト促進事業申請案件

①エンジョイ株式会社

500点中 359点 ⇒ 採択案件

②茨木青年会議所

500点中 293点 ⇒ 不採択案件

③COFFEE MEETS 実行委員会

500 点中 346 点 ⇒ 採択案件

④茨木市建設総合協同組合

500 点中 392 点 ⇒ 採択案件

<選考基準>

出席委員の評価点合計の 65%以上 ($100\text{ 点} \times 5\text{ 人} \times 65\% = 325\text{ 点}$) を取得した事業を、採択案件の候補とする。

ただし、上記基準を上回る事業であっても、個人の総得点の 1/2 ($100\text{ 点} \times 1/2 = 50\text{ 点}$) 以下の点数を付けた委員がいる場合は、協議のうえ採択候補案件を決定する。

以上